省三

――受賞作品概要

凪 和

渡利房江は、二十年来共棲みしている内縁の夫扶と、扶が連れてきたミシシッピアカミミガメの省三に、この頃うとましさを感じるようになった。

一九九五年の震災で、房江はたった一人の肉親であった母を亡くした。住んでいたマンションは電気、ガス、水道が断たれており、房江は四日ほど避難場所になっている小学校の体育館で母の骨とともに過ごした。段ボールの衝立を隔てた隣の区画には夫婦連れがいて、夫はいかにも頼りなさげで、妻は放心したようにあらぬ方を見つめてじっと座っていた。その様子は、近しい誰かを失ったのに違いないと確信させるもので、房江は喉元をひんやりした手で締め付けられるように感じて背筋が震えた。

自宅に戻り、三月下旬にガスが元に戻った。房江は自宅の風呂を熱い湯にして長いこと浸かった。そして、こんなにもしみじみする気分を言い合える相手がいないことにだらだらと涙が流れてきて、房江は母が死んでから初めて声をあげて泣いた。四月からは勤め先であった法律事務所の仕事も再開したが、その年末に事務所は閉所になり房江は仕事を失った。

翌正月三日に、房江は母の骨をフィルムケースに分けとって一緒に甲山に戻ることにした。坂道の途中、備え付けのベンチに、カサカサに乾いて繊維だけになった枯れ葉のような風情の男が一人座っていた。通り過ぎてから、房江は男が小学校の体育館で隣り合わせた夫婦連れの夫の方であると思い出した。下山の道で房江は男に声をかけ、男の妻が自殺したことを知る。男の「お乳触らしてもらうと落ち着く」という言葉から、房江は男を部屋に連れ帰ってしまう。それが扶である。

一月の終わりに、房江は清掃会社の事務の職を見つけた。春になり、扶が房江のところに引っ越してきたとき、片腕に結婚式の引き出物のような小引き出しを抱えていた。房江は、扶に与えた二LDKの一室にぽつんとあるだけの小引き出しが気になって一度こっそり覗いたことがあった。「……信女」「……童子」と書かれた二つの小ぶりな白木の位牌が一番上の段に入っていて、慌てて閉めた。以来、一切触れたこともなかった。

一緒に住んでみると、扶は何の頼りにもならない男であったが、房江はそれでいいと思っていた。むしろ、頼らない自分を誇らしく思っていたくらいである。省三もたいして手間をかけさせなかった。扶は毎月部屋代と言って十万円を入金し、勤勉に送迎バス運転士の仕事に出かけた。二人に子どもは授からず、内縁関係のまま今に至っている。

扶が六十歳の誕生日を迎えた。定年後も契約社員で働かせてもらうことになっていたが、とりあえずの退職祝いの席で酒を過ごし、自転車で帰宅途中に電柱に激突して前歯を折ってしまう。喋る言葉が聞き取りづらくなり、職を失った。

房江自身も、会社の社長が代替わりをして、清掃の現場に出るよう求められることになった。当然のように、給料も減額される。房江は一体今まで自分は何をしていたのだろうと思うようになり、ずっと家にいて何もしない扶が必要以上に目の中に入るようになる。胸に自分自身の屈託を抱えているからだとわかっていても、苛立ちの矛先は扶に向き、省三も目に障るようになる。

房江は省三のウンコを始末しようとして、自分をうかがっていた様子の扶に苛立ち「誰かもろうてくれる人でもおらんかなあ」と言ってしまう。不機嫌を抱えたまま仕事に向かった房江だったが、親会社の営業の男や二代目社長の言動に不安を感じ、ふいにベンチに腰かけていた時の扶の姿がよみがえり、朽ち葉のようだった男をたいして警戒もせず受け入れた自分を思い出して苦笑する。扶は、房江を苛立たせはしても警戒はさせない。

このところのあたりのきつさを反省しながら帰ると、玄関に扶が待ち構えていた。省三を引き取ってもらえるよう水族館に相談してきたという。「ずっと飼うたらええやん」と房江が言うと、扶は心底嬉しそうである。房江が省三の名前の由来を聞いたのをきっかけに、扶が息子の拓斗の死について語り始める。

「消防署のとこで会うたときな、ボクどうしたらええんかわからへんようになってん。ほしたら房江ちゃんが通りかかってな。房江ちゃん、自分で気ィついてたかどうか知らんけど、生きてるんか死んでるんかわからん顔しとった。ボク、この人は生かしてあげやなあかん、思うた」

扶の意外な言葉に、房江は今まで自分が助けたつもりの扶に助けられていたことを知って驚く。

省三の水槽の前に座り込んで、房江は扶が掛けている電話の声に耳を向ける。

「家内が飼うてええ言うてくれましたんで」受話器に頭を下げんばかりの話しぶりが、扶の高揚を感じさせる。「家内やって」房江は省三に向かって笑った。